

黙示録2章8－11節 「迫害の中で」

1A 主の御目 8－9

2A つかの間の試練 10

3A 第二の死からの救い 11

本文

黙示録2章8節から学んでいきます。今晚は、七つの教会のうち、スミルナの教会に対するイエス様の言葉を読みたいと思います。

私たちは前回の学び、エペソの教会に対するイエス様の言葉を読みました。そこで私たちが知ったのは、「愛が最優先する」ということでした。偽使徒たちの教えとの戦いをし、またあらゆる圧迫の中でしっかりとイエス様の名を保っていたのですが、初めの愛から離れてしまいました。それで、主との愛の関係のところに戻ることをイエス様は命令されます。ですから、これがキリスト教会に対する命令で、愛なのだということです。そして次、スミルナに対するイエス様の命令は、「苦しみと迫害に耐える」ということです。キリスト教会は愛に満ちているだけでなく、苦しみを受けるということも特徴であります。「あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に打ち勝ったのです。(ヨハネ 16:33)」この姿を、スミルナの教会に見ることができます。

1A 主の御目 8－9

8 また、スミルナにある教会の御使いに書き送れ。『初めであり、終わりである方、死んで、また生きた方が言われる。

スミルナという町について紹介します。エペソの北 55 キロ程にある、同じく地中海に面する湾岸都市です。現代もトルコで「イズミル」という名で、イスタンブール、アンカラに次いで 20 万人を有する第三の都市になっています。当時は、ローマの中で「アジアの美」とか「命と力の都市」とか言われました。その港町の美しさは、ローマ中に知られていたようです。今でもエーゲ海を眺める、今でも美しい観光都市です。

スミルナの歴史は、「滅ぼされ、また生き返す」というのが特徴になっています。そこはルデヤ人に紀元前 627 年に滅ぼされ、三世紀の間ただの村でありました。けれども、ギリシヤのアレキサンダー大王がここに来て、再建することに決めたのです。それで、「一度は死んでいたけれども、甦った」という誇りを持っています。そこでイエス様は、ここにある教会の聖徒たちに、「わたしが、初めであり、終わりである。死んで、また生きたのだ。」と言われたのです。主イエスこそが、死んだけれども甦られた方なのだ、と励まされました。

そして、スミルナは、シリヤとの戦いでローマと連合しました。その辺りからローマに対する忠誠を誓っています。紀元前 195 年には、ローマの女神の座を造り、紀元 26 年に皇帝ティベリヤのために神殿を建てました。次のペルガモが初めにその特権を得て、スミルナは二番目であります。ですから他のローマの町々に住んでいたキリスト者たちと同じように、彼らは皇帝礼拝の圧迫の中で生きていました。皇帝礼拝は、ローマ帝国が非常に大きいので、皇帝を神格化させることによって、一つの宗教を造り、それで国民を統合させていたのです。ですから、純粋な宗教心よりも、国に対する忠誠を示すためのものでした。そこでキリスト者たちが、「イエスが主です」「イエスが神の御子です」「イエスが救い主、キリストです」と告白していたのですから、非国民ということで激しい迫害を受けることになります。

「スミルナ」という町の名前は、「没薬」から来ています。スミルナは通商の要所であり、エジプトへ数多くの没薬も輸出していたのではないかと思います。そこで没薬は、ミイラのために使われていました。遺体の埋葬のために使われていました。そこで、キリスト者たちはイエス様のことを思っていたことでしょう。イエス様が生まれた時に、東方からの賢者は、黄金と乳香、そして没薬を捧げました。そして、イエス様が葬られる時にニコデモが、30 キロもの没薬を持ってきたのです(ヨハネ 19:39)。キリストが死なれたところこそ、没薬のような香りを放つことを彼らは思っていたことでしょう。そして彼ら自身が今度は、キリストに従う者たちとして、その信仰のゆえに殉教します。その殉教にも、キリストの香りが放たれているのです。

イエス様は初めに、「初めであり、終わりである方」であります。これは、黙示録 1 章でご自身をヨハネに啓示された時の言葉の一部です。時の初めから終わりまで支配しておられる方あります。どんな迫害や困難を受けようとも、主の教会には、全ての支配者がおられます。この方が私たちに勝利を与えてくださいます。イエス様は、「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。(マタイ 16:18)」と言われました。

そして、今話しましたように、「死んで、また生きた方」として語られます。彼らがこれから殉教しなければいけません。しかし、主ご自身が殉教され、そして甦られました。私たちは信仰のゆえに物理的に死ぬということは、この国、日本ではまずないと思います。戦時中はありましたが。けれども、霊的には常に「自分が死に、それゆえに生きる」という法則の中に生きています。「マルコの 8:35 いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。」

9 「わたしは、あなたの苦しみと貧しさとを知っている。…しかしあなたは実際は富んでいる。…またユダヤ人だと自称しているが、実はそうでなく、かえってサタンの会衆である人たちから、ののしられていることも知っている。

エペソの教会に対するのと同じように、主イエス様は彼らの状況をよく知っておられました。「あ

なたの苦しみと貧しさを知っている」と言われます。ここでの貧しさは、ギリシヤ語では極貧を意味する言葉だそうです。なぜ彼らがそうってしまったのか？非常に美しい町、スミルナでなぜ彼らが極貧の生活になっていたのでしょうか？「苦しみ」とあるように、これは信仰のゆえに貧しくなっているということでもあります。経済的な迫害と言ったらよいでしょう。キリスト者であるということで、社会的に受け入れられず、働くこともままならなくなっていたのかもしれませんが。そして財産が没収されていたのかもしれませんが。今、イスラム国によって追われたイラク人のキリスト者のことを思いま。す。彼らは着の身着のまま逃げて来たのですが、自分の家にある財産は全てイスラム国によって奪い取られました。ヘブル人への手紙にも、迫害の中で財産が取られることが書かれています。「ヘブル 10:34 あなたがたは、捕えられている人々を思いやり、また、もっとすぐれた、いつまでも残る財産を持っていることを知っていたので、自分の財産が奪われても、喜んで忍びました。」

私たち日本に住むキリスト者が、このように極貧になることはないかもしれませんが、しかしキリストの命令に従うので、経済的な損失を被ることは十分にありますね。職場において、昇進するような立場に付けないとか、いろいろあることでしょう。しかし、だからこそイエス様は、「貧しい者は幸いです。神の国はあなたがたのものですから。(6:20)」と言われました。

そして驚くべき言葉があります。「しかしあなたは実際は富んでいる。」であります。イエス様を信じて生きていくということは、このようなどんでん返しのような世界の見方をしていくことでもあります。イエス様は、極貧の人々に向かって「実際は富んでいる」と言われます。主は、七つの教会の最後、ラオデキヤの教会に対してはその反対の事を言われます。「3:17 あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、衰れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。」何をもって、貧しいのか、富んでいるのかというと、それは信仰においてそうであると、ヤコブは手紙の中で言いました。「神は、この世の貧しい人たちを選んで信仰に富む者とし、神を愛する者に約束されている御国を相続する者にされたではありませんか。(ヤコブ 2:5)」

主の御言葉、聖書の言葉を学ぶ度に、私たちの肉眼がどうしても、世の富に魅かれてしまうことを思います。あるビデオを昨日観たのですが、これはフィクションだと思いますが、良い話です。それは富豪の父が息子を連れて、体験学習として極貧の農夫のところ数日、生活を共にしたそうです。息子にどうだった？と聞くと、彼は答えました。「僕たちにはペットの犬が一匹だけれども、四匹もいた。」「僕の家にはプールがあるけれども、そこには泉があって川が流れていた。」「うちには庭にランプの光があるけれども、あっちは星空で輝いていた。」「土地は小さいね、うちは。あそこは、ものすごく広い畑があった。」「そして壁がうちにはあるね、泥棒が入らないように。でもあっちは、友達がいる。」お父さんが驚いたそうです、そして息子さんは、「僕たち、本当は貧乏なんだね。」¹このように、どれだけ自分たちが固定概念で、富んでいることを決めてしまっています。信仰

¹ <https://www.facebook.com/brightside/videos/1017314598397283/>

のこと、霊的なことであるならばなおさら、私たちの富は信仰と後に来る神の国に拠っているのだということが分かりますね。

そして迫害を誰がしているかと言いますと、おそらくその町全体から、社会一般から受けていたと思いますが、それだけではありませんでした。「またユダヤ人だと自称しているが、実はそうでなく、かえってサタンの会衆である人たちから、ののしられていることも知っている。」とあります。これは、イエス様を信じていないユダヤ人たち、そのシナゴグのことを指しています。パウロがローマ人への手紙 2 章で、このように説明しました。「2:28-29 外見上のユダヤ人がユダヤ人なのではなく、外見上のからだの割礼が割礼なのではありません。かえって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、文字ではなく、御霊による、心の割礼こそ割礼です。」ユダヤ人という呼び名そのものが、主をほめたたえ、主を信じて、主との契約を持っている民であるはずなのですが、そうではないことを今、彼らは行なっているのです。神のものとされたキリスト者を迫害しているのですから。

そして、「かえってサタンの会衆である人たち」と言っています。イエス様に殺意を抱いていたユダヤ人たちがいて、彼らは「私たちの父はアブラハムです」と言っていました。イエス様は、「ヨハネ 8:44 あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。悪魔は初めから人殺しであり、真理に立つてはいません。彼のうちには真理がないからです。」血縁関係がどんなにユダヤ人であろうとも、霊の戦いというのは生々しく、現実のものとして存在していて、サタンがキリスト、またキリストに属している者を憎ませることをしている、ということでもあります。そして使徒ヨハネは、はっきりとキリスト教会の中でも、同じことが言えることを話しました。「1ヨハネ 3:10 そのことによって、神の子どもと悪魔の子どもとの区別がはっきりします。義を行なわない者はだれも、神から出た者ではありません。兄弟を愛さない者もそうです。」ですから、私たちがどのような霊の戦いにいるか知らないといけません。兄弟を愛さないこと、憎んでいるということは、どこから来ているのか？ということ。悪魔から来ています、ですから霊の戦いの中にいます。

どうしてユダヤ人がそんなに、キリスト者を迫害するようになったのか？彼らもまた、実はローマから迫害の対象になっていました。ローマの植民都市ピリピでは、パウロがむち打たれましたが、それは彼がキリスト者というよりも、ユダヤ人だからでした(使徒 16:20)。そして、アクラとプリスキラは、パウロにコリントで会いましたが、彼らは皇帝クラウデオによってユダヤ人がローマから追放されていたからです。多神教の中で、異教社会の中で、ユダヤ人は迫害の対象にされていたのです。けれども、スミルナにおいては、早くからユダヤ人共同体ができていて、彼らがローマの役人たちにも声を出すことのできるほどの影響力を持っていました。そして興味深いことに、今のトルコのイズミルには、シナゴグがいくつか残っています。

彼らは、ローマによって迫害されているキリスト者と、自分たちが一緒にされることを殊更に恐れて、それでむしろ、彼らを周縁に追いやることによって、自分たちを生かしたのです。かつてのユ

ダヤ人宗教指導者も、同じような恐れを持っていました。「ヨハネ 11:48 もしあの人をこのまま放っておくなら、すべての人があの人を信じるようになる。そうすると、ローマ人がやって来て、われわれの土地も国民も奪い取ることになる。」自分たちの既成の体制が、イエスというものによって壊されて、それでローマが自分たちの土地も国民も奪い取ることになる、ということを知って、それでイエスを殺すことに決めたのです。

もちろん、福音に対する純粋な妬みもあったことでしょう。ユダヤ人だけでなく、異邦人も神を信じる信仰によって救われるということが大きな妬みをユダヤ人が持つということは、パウロがローマ 11 章で話したことです。

このように、迫害というのは純粋に外部からではなく、内部からも来るということを知る必要があります。世の迫害を免れるために、世と一つになるという生き残りを内部の者がするのです。すると、内部の者が迫害を始めるのです。同じ神教であるがゆえに迫害や圧迫を受けていたユダヤ教の共同体がそうであったように、迫害は想像以上に複雑です。聖地旅行でベツレヘムにおいて、福音派の信者がガイドになったことがあります。ベツレヘムではイスラム教徒が多くなっており、そのためにキリスト教徒が圧力を受けているということを聞いていたのですが、彼は、「ムスリムとは共存している。」と言っていました。むしろ、「家族や親戚からの反対や迫害が大きい。」と言っていました。彼らはギリシヤ正教徒です。伝統的にキリスト教徒なのですが、御霊による新生体験はしていません。本当にイエスを信じた時に、「やめてくれ！」ということに反対するのです。

そして、ここに「ののしられて」いるとあります。事実無根の中傷を彼らは受けていました。具体的には、こんなものです。彼らは、聖餐式を守っていました。裂かれたパンはキリストの体を表し、ぶどう酒の杯はキリストの流された血を表していましたが、ユダヤ人は、「彼らは宗教儀式の中で人食いをしている。」と中傷しました。そして兄弟と互いに教会で呼び合っていました。それで、「彼らは家族制度に反対している。」と中傷しました。ローマでは家族単位は重んじられていたので、そう言われたのです。

2A つかの間の試練 10

10 あなたが受けようとしている苦しみを恐れてはいけな。見よ。悪魔はあなたがたをためすために、あなたがたのうちのある人たちを牢に投げ入れようとしている。あなたがたは十日の間苦しみを受ける。死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。

迫害され、貧困になり、ユダヤ人から中傷を受けただけでなく、彼らの中で物理的に投獄された者たちが出てきます。おそらく、その美しい街並みの中に、地下牢があって、そこに排斥物が溜められているようなところに押し込められたのかもしれない。そして餓死、あるいは処刑されて、殺されることとなります。また、競技場に連れて行かれたのかもしれない。そこに野獣が解き

放され、生きたまま喰い殺されたかもしれません。あるいは、杭に縛られて、火あぶりに刑に遭ったかもしれません。このような恐怖が彼らを襲いかかりました。

しかし主は言われました。「あなたが受けようとしている苦しみを恐れてはいけません。」覚えているでしょうか、イエス様が弟子たちに教えられていたことです。「ルカ 12:4-7 そこで、わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、あとはそれ以上何もできない人間たちを恐れてはいけません。恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺したあとで、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。五羽の雀は二アサリオンで売っているでしょう。そんな雀の一羽でも、神の御前には忘れられてはいけません。それどころか、あなたがたの頭の毛さえも、みな数えられています。恐れることはありません。あなたがたは、たくさんの雀よりもすぐれた者です。」迫害、また拷問のような苦しみを受ける時に、その恐れに打ち勝つのは、主への恐れです。その苦しみは一時的なものであり、死んだ後の魂に対して指一本触れることはできませんが、主ご自身は死後にゲヘナに投げ込むことができるのです。ですから主を恐れる時に人を恐れません。主は頭の毛さえも数えておられるほど、私たちのことを覚えておられます。私たちの住んでいる日本社会は、霊的には「恐れ」によって成り立っている社会です。自分が何かをしたら村八分にされる、ということを中心信じている社会です。ですから、これはとても切実な戦いです。人を恐れるのではなく主を恐れま

す。そしてこのことをする者たちの背後には、悪魔がいます。「悪魔はあなたがたをためす」とありますね。迫害や反対の背後には悪魔がいます。それで悪魔に立ち向かうのです。「1ペテロ 5:8-9 身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのよう、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。堅く信仰に立って、この悪魔に立ち向かいなさい。ご承知のように、世にあるあなたがたの兄弟である人々は同じ苦しみを通して来たのです。」そして、「あなたがたは十日の間苦しみを受ける。」と主は言われますが、これは苦しみが長くは続かない、あなたの信仰が試されるのは一時期だけなのだよ、ということです。ダニエルが王の食べるごちそうの肉を裂け、十日間私たちを試してください、野菜だけ食べさせてくださいと願い真下ね(1章)。それと同じ使われ方をしています。

それから、「死に至るまで忠実でありなさい。」と言われます。イエス様は「忠実な証人(1:5)」と呼ばれました。証人という言葉には、殉教するという意味合いが含まれることを以前学びました。イエスを主として生きるということには、実は自分が死ぬかもしれないという使命を帯びていると言っても過言ではありません。私たちは主のために死ぬ用意ができていますか？その心の用意があつてこそ、キリストが私たちの内に生きてくださいます。そして大事なものはイエス様の約束です。「そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。」主は、最後まで忠実な者に冠を用意しておられます。テモテ第二 4 章には、パウロがネロによって死刑にされる直前に、義の冠が待っていることを話しました。ここでは、「いのちの冠」です。主のために死ぬのであれば、命の冠を受け取ります。「ヤコブ 1:12 試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する

者に約束された、いのちの冠を受けるからです。」

3A 第二の死からの救い 11

11 耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。勝利を得る者は、決して第二の死によってそこなわれることはない。』

主がそれぞれの教会に語られている呼びかけです、「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」であります。ここで主の勝利者への約束は、「決して第二の死によってそこなわれることはない。」であります。これは黙示録 20 章と 21 章に書かれていることであり、第一の死は肉体の死ですが、永遠に神から引き離されている苦しみが第二の死であります。「20:13-14 海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中にいる死者を出した。そして人々はおのこの自分の行ないに応じてさばかれた。それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。」死を恐れるな、そして勝利者には永遠の死、第二の死によって損なわれないという約束であります。私たちは本当に恐れなければいけないものを、恐れる必要があります。第二の死です。これがあることを、忘れてはいけません。

スミルナの町の歴史に戻りましょう。スミルナには、パゴス山というアクロポリス、ギリシヤ式の要塞があります。海辺からパゴス山までには、「黄金通り」という有名な街路がありました。スミルナの町では一回に、1500 人が殉教したと言われ、その山の上でさらに 800 人が殉教したと言われています。

そしてスミルナからは、ヨハネの弟子ポリュカルポスという教会の監督がいました。紀元後 65 年から 155 年まで生きていました彼は幼い時からキリスト者の家に育ち、そして教会の監督に任命されました。彼は聖書を教え、異端論駁もしていきました。そしてピリピにある教会には、「徳を重んじ善を行う生活をし、キリストにある信仰によって救われたのだから、万一、死ぬような事があっても信仰を捨ててはならない。」と勧めました。ある時に、夢を見て自分の枕に火が付いていました。それで友人に、「私が杭に打たれて、火あぶりになるのは近い。」と漏らしました。案の定、ローマ地方総督の命令で、彼を捕縛するべく兵士たちがやってきたのです。彼は、少しも恐れず、兵士たちに挨拶をして、なんと、食事を出すように言いつけ、もてなしたのです。そして「一時間ほど祈らせてください。」と頼みました。彼は、祈っているうちに喜びにあふれ、熱く聖霊に満たされ、イエス・キリストの救いを語りました。兵士たちは、「こんな善良なおじいさんをどうして捕えるのか。」と恐れを抱いたそうです。

けれども命令ですから従わないといけません。兵士たちが命令違反したら罰せられますから、ポリュカルポスは逆にすぐに地方総督のところ連れて行くように促しました。そしてローマの役人たちは、「どうか、あなたを殺したくないから、信仰を捨ててくれ。」と頼みましたが、彼は頑なに拒みました。せっかくの善意を断ったので、怒って、死刑台に引きだしたのです。

そして有名な言葉があります。執行官が最後の機会を与えました、「キリストを呪いなさい。そうすればあなたの命は助かる。」すると彼は言いました。「私は 86 年間、キリストに従い続けてきましたが、キリストは、その間ただの一度も私に不幸をお与えにならず、恵みのみを与えてくださいました。こんなにまで私を愛してくださるお方を、どうして呪う事ができましょう。」そして火で焼かれることについて、こう言いました。「どうして、私の王であり救い主を呪えましょう。あなたは、つかの間に燃える火によって私を脅していますが、少し経てばこの火は消えます。あなたが知らないのは、悪者のために用意されている永遠の火の罰なのです。」そうです、まさにイエス様が仰っている、第二の死のことを話したのです。それで執行官は怒り、彼を杭に付けました。普通、釘で打ち付けるのですが、ポリュカルポスは「そんな必要はない。私は動かない、手だけを縛りなさい。」と言いました。執行官は、火をつけたのですが、なんとアーチ形ようになって火が回りによけて、彼の体に火が付かなかったのです！執行官はやむなく兵士に命じて、彼の脇腹を槍で付かせました。そして彼は死に、炎の中で焼き尽くされました。²

初代教会は、このようにしてローマ帝国の中で迫害を受けていきました。初めに起こった本格的な迫害は、パウロ自身も殉教したネロによる迫害です。そしてヨハネが迫害を受けていた、皇帝ドミティアヌスによるものがありました。それから散発的に迫害はありましたが、帝国が衰退していた時に、強い君主政治が必要だと考えました。けれども、皇帝礼拝に基づく国教にキリスト者は屈しないであろうことを知っていたディオクレティアヌスは、303 年にキリスト者への積極的な迫害を求める勅令を出したのです。当時、キリスト者の数は 5 千万から 7 千 5 百万と言われ、総人口の 15%にも達していました。教会が集まることを禁じ、聖書は焼き捨てられ、財産は没収されました。異教の神にいけにえを捧げることも強要されます。牢獄にはキリスト者があふれかえって、犯罪人を入れる余地がなかったと言われていています。あのローマにあるコロシウムは、剣闘士がどちらかが死ぬまで戦うエンターテイメントですが、ライオンが連れて来られて、そこにキリスト者が連れて来られて、生きたまま喰い殺されるのを見て、楽しんでいました。

けれどもキリスト者は、カタコンベと呼ばれる地下洞窟で礼拝を捧げ、絶滅することはなく、むしろ広がっていったのです。そして 313 年に、自らキリスト者となった皇帝コンスタンチヌスがミラノ勅令を出して、キリスト教を公に認めたのです。

160 年辺りから 220 年辺りまで生きた、テルトゥリアヌスというキリスト教神学者がいました。彼の残した有名な言葉が、「殉教者の血は教会の種」というものです。イエス様は、スミルナの教会に対して何一つ叱責する言葉を残しておられません。なぜなら、テルトゥリアヌスのいうように、迫害は教会を清めるだけだからです。清められた教会には聖霊が働きます。それで拡大するのです。私たちは今、大迫害の時代に生きています。世界中で殉教する人々の数はここ数年、倍増しています。しかし同時に、キリストを信じる者たちの数も急速に増えているのです。私たちは、決して貧

² <http://ameblo.jp/1tubunomugi100tubu/entry-10770910857.html>

しい者ではありません、信仰によって豊かにされた者たちです。

2A 妥協する教会 12-17

1B 忠実な証言 12-13

2B バラムの教え 14-16

3B 白い石の新しい名 17